

2008 年度 卒業論文

題目 山あいの農地でパンを焼き荒神様に奉納する実践報告

カ
ト
「

学籍番号	30451701
氏 名	仁城 亮彦

●序論 活動計画

2008年1月、卒業研究の開始とともに、ブログ (<http://825.nagomifarm.jp/>) を開設した。ブログの名前は「825日記 -なぜパンを焼くか-」とした。「825」とは、我が家の農地を含む山一帯の呼称で、この地域（岡山県井原市青野町）では「ハチンゴ」と呼ばれている。土地の登記簿では「ハチニゴ」となっているので、おそらく古い番地に由来している。このブログでは卒業研究の過程が写真とともに公開されているのだが、その内容が、パン屋の準備、農家の営み、村おこしの活動、あるいは趣味や道楽などのように見えたり、あるいは端から「芸術だ、アートだ」と認識する人もいるかもしれない。このブログから、それらのいずれか（あるいはすべて）にとって価値のある何かが生まれる、発見されるならば、それはそれで歓迎すべきことだと思うので、ぼくはいずれも否定しない。

ただ、自分としては1つの目的がある。それは、芸術学科の卒業論文を書くための資源となるものを、ということだ。ぼくは今、自分なりに「芸術とは何か」という問いを発し、これに対して、モノを見たり作ったり、本を読んだりなどして、自らの感性を働かせ、思考をめぐらせ、その結果を言葉にしてまとめることが求められている。つまり、1つの「芸術教育」に思考と実践が導かれているのだ。

芸術学コースのシラバスには、そのまとめ方として「芸術史研究」と「調査報告」という2つの論文のスタイルが示されている。この論文には後者を適用することになるだろう。ただ、調査対象として「今日的な地域の芸術活動や自他の芸術実践」と示されているが、自分の実践に含まれる芸術的な意味については、論文の結論まで（あるいは読み手が判断するまで）留保されることになる。

さて、ぼくは報告しようとしている活動は、次のような2つの方針で計画することにした。

【方針1】 自分の身体を使い可能な限りモノやサービスを買わない

お金がないからという理由でこの計画が中止にならないよう予防するという意図で、ものを作る際には、できるだけタダで手に入れられる素材を用いること。また、この計画のための特別なお金を準備しないこと。

【方針2】 ごみを発生させない

芸術大学での学習は結果としてよくごみが発生する。作品に使われなかった余分な材料などは当然そうだが、作品自体も誰も欲しがらなければ何の役にも立たないごみとなる。何を作るにしても、原料／作品の区別なく、将来にわたって捨てる（廃棄物処理する）必要

がないもの（放っておけば自然に帰るもの）を設計すること。

上記の方針を踏まえて、卒業研究は次のように計画した。

地域にある身の回りの自然素材（石、土、木、竹、水など）を用いて、代々受け継がれている山の中の農地（825）でパン窯を作る。そのパン窯で焼くパンに使う材料の小麦を自家栽培し、パン用の酵母菌を825で採取・培養する。燃料の薪も825の雑木を用いる。実際にパンを焼いて、最後には、この地域で行われる7年に一度の神楽（荒神神楽）の際に、荒神様という近所の神様へ奉納する。

もしこの一連の活動が、一般のパン屋や農業としての行為あるいは物作りであれば、食品衛生、あるいは利潤や効率の追求を優先するべきという観念に、その方法や内容が規定されることだろう。とりあえず、この活動はそれらいずれでもないこととし、多くの自由を保持する。だからといって、清潔であること、経済的であることをないがしろにするつもりは全くない。むしろその本質をより理解するための自由である。なぜ、パン屋や農業を意識するのかというと、それは今こうして芸術教育に導かれ芸術学を志す自分とは別に、山あいに暮らしながら、パン屋や農業に携わる可能性を十分にはらんでいる人生をぼく自身が自覚しているからに他ならない。

近い将来、パン屋、農業、芸術学（あるいは芸術教育）のいずれかを専門的に選択するにしても、あるいは横断的に携わるにしても、ぼく自身の生き方は自分自身にとって、またできることなら他の人にとっても、死にかけた生活を修復・再生するのに確かに有効でなければならないと考えている。卒業研究によって、それが十分に実現できる環境を探り、志を持続したい。

●本論（陰） パン屋と農業と芸術学（あるいは芸術教育）

人間は特別な存在ですべての生きものの頂点に立つ、という思想の反省を持続させる必要はあると思うが、一方で、その反省は、人間としての自分の生き方を問うことを抜きにしては成り立たない。

人間は生きものを食べないと生きていけない。すべての生きものの頂点に立つということは、何を食べてもよい、ということだ。どう食べるかを問わねばならない。実際、人間は食べたいものを食べている。ただ、多くの人はその生命を持った生きものだった時のことを直接見る経験がないまま食べている。口にすることはすべて生きものだった、ということを知っている、ただそれだけで生きものの頂点に立っていると思えるのは、やはり人間だからだろう。

すでに、ぼくらは「食べて知る」ことよりも「知って食べる」ことを圧倒的に求めている。食べるものの生育や流通の過程で生きものでないもの（例えば農薬や抗生物質など）が加わったりしている事実や、生命としての異変を持つものの存在とその社会的な問題（例えば BSE 問題など）を知らされれば、安心・安全の食材を求めたり、生きものの頂点に・・・などと思いついていっているのはいかなものか、と問い直す。また、家庭や地域の伝統食やこれを食べることの意味が、その場所でそれを作る人から直接伝わることも少なくなっている。それに、食べるという行為が商取引を前提とする以上（多くの人には食べるものを直接自然から得ることではない）、自分が関わる食べ物の商取引が公正に行われていることを確認するには情報が必要だ。商取引が外国相手のものだとしたら貿易商の活動や国家間の政治的な判断の影響も受けるだろう（自動車を売るかわりに買うことになる小麦など）。だから、食べるということに限ってみても、それを権力や情報との関わりを完全に切り離して考えるのはとても難しい。「食べて知る」ことの自由はいかにして得られるだろうか。

すべての情報は受け手を説得するよう構成される。多くの場合、情報が説得力を持つかどうかは、それが論理の正しさより、情報の伝え方、情報がどのように構成されるかに大きく影響する。例えば、専門家や専門機関など権威を持っている者が情報源であると示す、多くの人が見るメディアで伝える、受け取る人の感覚にとって情報が心地よく整っていたり、写真、映像、音声を使用される、一方的に何度も繰り返される、などだ。論理的な正しさを持たせるのとは別の方法で説得力を持たせるための戦略や戦術は、大学などで「芸

術」を学び、そこからヒントを得て仕事をする放送作家、編集者、映画監督、デザイナー、アートディレクター、教師などが担っている。

ところで、論文というものがある。そのほとんどはウソが無く、筋道の通った情報として、皆が必要に応じて参照する。体裁も分野によって多少の差異はあるものの、それほど変わったものではなく、それに体裁が珍しいということで信用を多く得るということもない。ウソがバレた場合、権力やメディアのように強引に通したり、言い逃れるのは難しい。情報はその受け手を説得するために構成される、といっても、本来、論文は世に対しては控え目な存在だ。世に出てくる論文もあるが、世に出す役割を担うメディアやその「科学」の権威をあてにする権力にとってメリットがある場合がほとんどだ。そうして「科学」は学問を飛び出し、騒々しさをまとってメディアに現れることになる。論理的な正しさを確認するという本来の受容がされなくなってしまう。

メディアに構成され世に出てくる「科学」の「騒々しき」は、極めて広い領域で今の時代の有り様や人の生き方を規定し、人間の精神や身体の諸活動から自由を奪う。もちろんすべての科学の研究や理念の全否定を意図してはいない。ぼくはここで、科学的でない「科学」が、隙あらば日常の生活やその基盤に侵入し、生活全体を矛盾で塗りつぶそうとしてくるのを感じていて、その「感じ」を無視することができない。

例えば、近年の環境問題の筆頭に挙げられ広く知られている「地球温暖化」という現象について、生活レベルで科学的に理解し納得することが困難な状況にある。「地球温暖化」の原因については、人類が石油を燃焼することで排出する二酸化炭素にあるという学説が全世界的に支持されており、多くの人がそれが事実だと信じて疑わない。一方で、例えば、過去の観測データに基づき、気温と大気中二酸化炭素濃度の二者関係に着目して、常に気温の変化が先んじていたという結論を示すなどして、「二酸化炭素地球温暖化脅威説」の矛盾点を指摘する説（近藤邦明『温暖化は憂うべきことだろうか CO₂ 地球温暖化脅威説の虚構』、不知火書房、2006年、p73）などは、生活者の耳に届きにくい。また「リサイクル」することや「環境のため」のものを作ったり買ったりすることは、廃棄物を処分できない消費者にとって、実際にどれほど「環境のため」になっているのか、その現場を確認することも、基準を決めることもできない。もはや、これらは自然を科学的に理解することより、ある学説を「経典」として「信じる」ことが強要されている状況を示している。

騒々しい「科学」によって、ぼくらは「地球温暖化」を「防止する」などという、人間の

身体的尺度からはるかにかけ離れた現象に対する「取り組み」を日々要求されている。また、行政及び企業の多くの事業はこの「CO₂ 地球温暖化脅威説」が正しいことを前提に、生活者の目に入りやすいしかたで頻繁に告知されることが因襲化している（メディアの傭兵たちを従えて）。そして、多様な自然現象の中で条件が重なって起こる「自然な」異常気象でさえ、元をたどればすべて（石油を消費する）人類に原因があるという思い込みも生じるようになる。

そうした状況を作り出す首謀者や加担している何者かに対する疑念や、いつのまにか自らが巻き込まれてしまうこの状況を乗り越えるために、ぼくは「静かに考えて自分でなんとかする術」を学ぶ必要がある。卒業研究の題材においては、そうした時代に生きている日常の実感もまた、静かな場所を作り自分の生き方を再考したい、そしてその実行可能性を確かめたい、という動機となっている。ぼくにとっての芸術学（あるいは芸術教育）とは、その実践に他ならない。

21世紀に入ってから、産業界、行政、そして「科学」の連携による騒々しさは増す一方で、ぼくらが世界や自分を「理解する」ことの困難さに加えて「信じる」ことの困難さもまた増しているように思う。ぼくらの心には確かに「信じる」メカニズムが備わっているのだろう。「自然な」異常気象が神から与えられたものと思うか、あるいは原因が人間にあると思うか、どちらにしてもぼくらの「信じる」という心のメカニズムが機能していることに違いはない。しかし「信じる」という心の働きを、どのように自分自身に用いるかは、やはり自分で決めなければならない。そのためには「理解する」ことが比較的簡単な物事が自分を取り囲みやすいことを自覚し、その状況に自らを投じて固有な関わりを持とうとする、すなわち身近なところでの「緊張感のある試行錯誤」が、必要ではないかと思う。パン屋だから、あるいは農業だから当然こういうものだろう、といった固定化した観念を疑い、そして新しくする。この卒業研究で目指すことは、パン屋や農家の個性作りというレベルではない。大げさに言えば、この世にパン屋がなかったところへパン屋を作る、未だかつて農業などなかった世界で農業を始める、そんな野心的な実践であり、控え目に言えば、パン屋が販売するつもりのないパンを焼くこと、農家による現金化を期待しない野良仕事、という個人的でささやかな日常だ。いずれにしても、どう食べるかという思考と実践によって、パン作り、野良仕事、芸術学の研究、それぞれを交通させる、とりあえずの仕掛け作りであり、確かにぼくが芸術教育に導かれた結果である。

●本論（陽） 活動の経緯

活動計画は卒業研究のために企画したが、活動そのものは生活と連続している。また、身近にあるものを組み合わせて、行う順番を決め、実行するというのは、従来の生活領域で行うことと何ら変わりはない。冷蔵庫にあるものを使って晩ご飯を作ってみなで食べるのと同じことだ。ただ、具体的に見れば、計画は家から少し離れた農地を拠点とし、2008年1月ごろから2008年11月ごろまでの期間に限定され、本論（陰）のような意味づけがされようとしている。活動は、普段の生活とは異なるフレームに収められ、認識されるように企画されている。

しかし、実際には生活と活動の境界はどこまでも曖昧だ。生活は家、活動は畑や山というそれぞれの中心を持つが、周縁ではそれらは一体となりながら、お互いに必要な時間、場所、物質、エネルギー、そして知識や経験などを分け合い、補い合いながら進行していく。また、活動のためのそういった資源はこれまでの、あるいは進行中の生活から得られるものがほとんどだ。つまり、ここでの活動とは生活に対し後発で、それ自体が必要な資源を生産する（自給自足する）ものとしてではなく、生活から様々な資源を取り入れ、何かを作り（あるいは壊し）、生活にフィードバックする（あるいは捨てる）ものだ。活動と生活は、生活と自然の関係に似ている。

したがって、活動の経緯は生活との対話の記録をたどることになる。活動の内容については、農作物・農作業、パン窯作り、パン作り、訪問者・協力者、ブログの更新、そしてパンの奉納とわけてまとめ、それぞれでの考察を記述する。

◎農作物・農作業

・小麦の栽培

小麦の栽培・管理については、ほとんど家族（主に父）にまかせた。といっても、実際、畑での農作業はほとんどなかった。

活動計画を元に、ブログを開設して、いよいよ活動をはじめようとした2008年1月、すでに小麦は砂田（スナタ）と呼ばれる畑に数センチの芽を出していた。畑を耕して小麦が撒かれたのは活動以前であり、活動開始としての作業は麦踏みからとなった。麦踏みとは、足などで芽を踏みつけては土を軽くかける、株の根張りや分蘖を促すための作業である。一般に、水不足など危機を経験した植物は通常より多く花を咲かせ実をつける、といわれ

る。ストレスも条件を満たすものなら、生物を一定の方向へ生長させ、それを取り込む生きものにとってもより有り難い資源となる。生命は外から与えられる危機を内部化し、全体として乗り越える仕組みを持っている。

ところで、田んぼというのは周囲の田んぼと水路でつながっている。水は高いところから低いところへ流れるので、農薬を使用する慣行栽培の水田が上流にあると、単独で農薬を減らす（農薬をできるだけ買わずにすむ）稲作は難しい。農薬を減らしつつ収量を確保するとなると手間が増えるので、全体で合意を形成するのは政治的（教育的）な活動が必要になる。しかし、小麦の栽培なら煩わしいことがなく単独でチャレンジできる。今回の小麦栽培は、農業が目的ではないので収量もあまり気にしない。だから、無農薬栽培（農薬をまったく買わずにすむ栽培）の敷居はとても低く、容易に実現できた。ちなみに、田の水路には青野池から流れてきた小さなフナなどがいて、それを捕るのが作業や見回り時の楽しみだった（ぼくの娘より楽しむぼくの母がいた）。

小麦についての農作業は、2007年秋に種まき、2008年1月～3月に麦踏み、6月に刈り取り、7月に脱穀となった。ほとんどを手作業で行った。

・松の大木を伐る

825 にパン窯を作ることを決めた際、その場所のすぐ横には、すでに全体が枯れている松の大木がこちらに向かって傾いていた。樹齢は50年ほどと思われる。いずれ倒れてきそうなので伐ることに決めたのだが、これもまた親心か、2008年3月に父がチェーンソーで伐り倒してくれた。それから5月のはじめ頃まで、倒した木を丸太状に切っていた。それは自分でやったが、その時チェーンソーという道具を初めて使った。はじめは、この道具を非常に恐ろしく感じたのだが、倒れた木の幹を輪切りにしていく繰り返しの作業で慣れることができた。

輪切りにした松の丸太は、楔、かけや、木割り斧を使って、一部は薪にした。これはパン焼きの燃料となるものだ。薪にできなかった丸太はそのまま放置されているが、それはごみにはならない。自然から直接得たものは、放っておけば自然に戻る。自然からはみ出さずに生きていれば、825にごみは生じない。槌田敦は『弱者のための「エントロピー経済学」入門』（ほたる出版、2007年）の中で、「廃棄物の発生原因は商品取引である」（p140）と述べている。

◎パン窯作り

パン窯に関する作業は、整地、土と石の採取・運搬、窯作り、屋根作り、火入れという工程となった。

825 の土地はすべて斜めだ。それも通常畑にしにくいほどの急角度だ。水平な場所を作るために整地をすると、それがどれほどの傾斜なのかよくわかる。整地をした場所は本当に居心地いい。水平な場所を歩くことに身体がなれているので、斜めのところにいるだけで余分に神経とエネルギーを使っているのだろう。整地には、農具の鍬とスコップを使った。窯の主原料は赤土だ。建設中の広域農道の工事現場で土砂の運搬業務を請け負っている近所の三宅さんというおじさんが、2 トントラック一杯分を運んでくれた。三宅さんとは、このあたりでは珍しく跡継ぎがいる専業農家で、皆が一目置いている「むかあのとっちゃん」のことだ。様々なコンピュータ技術に通じている人をハッカーといい、なかでも特別に技術を持つ人をウィザード (wizard) やグル (guru) と呼称する (『ハッカー』、Wikipedia) が、とっちゃんはいつも笑顔の「農」のウィザードだ。

ところで、ぼくはその広域農道の建設事業を非常に嫌悪していた。大量のダンプが行き交い、山を削って足がすくむような谷を作って道を通し、5 軒ほどの農家が畑に行くときにしか通らない場所に 1 億数千万円 (税金) と噂されるコンクリートの橋を架けたりした。その建設は土地の風景を一方的に変えてしまった。さらに、削った山の土を盛って谷の途中を埋めて道を通した。仁城家の墓はその谷の上部にあり、先祖と共に慣れ親しんでいる場所も閉塞感に満ちている。パン窯のために、むかあのとっちゃんがその職権を行使して現場から赤土をわけてくれたので、しばらく建設事業を批判するのはやめにしたが、ぼくらは未だ許せないでいる。土をもらったときにはむき出しだった、赤土で真っ赤な山肌は、今はすでにコンクリートで覆われている。

パン窯はある程度の高さがあったほうが作業しやすい。高さを得るためには重たい土のドームを支える台が必要だ。そこで、石を集めて台を組むことにした。通行量が少ないため整備があまりされない山道に行って落石を拾った。特に通行量の少ない (=あまり整備されない) ダムの周囲を巡る道には落石が多かった。

ドーム作りは鹿児島から来た義父に手伝ってもらった。実家の庭先にブルーシートを敷き、そこで赤土に水と切り藁を混ぜて練った。それを団子状にしてぶどうの収穫用コンテナに並べ、825 に運び込んだ。赤土を練る際に切り藁を混ぜるのは、繊維質が成形時に強度を増すというのを想定してのことだ。実は、藁についている微生物によって発酵がおき、粘

土の粘りが増すらしい。ドームは翌日形になり、後日さらに粘土の厚塗りをした。レンガと粘土で煙突も作った。

チェーンソーの使用に慣れたので、屋根の柱の材料を自分で山から伐り出すことにした。マツ材線虫病（通称、松食い虫）で立ち枯れたと思われる松の木を伐った。これはよく乾燥していて運搬も楽ですぐに材木として使用できた。道具になれるというのは単に作業が早くなるだけではなく、より使いやすく質のよい材料を求める気持ちを高めた。柱以外の材木と釘は市内のホームセンターで購入した。屋根の波板はコメリの Web ショップで購入した。結局、身近な人間に身近な素材だけで建物の屋根を作る肝心な知識・技術を持っている者はいなかったのだ。

◎パン作り

妻は生活の中で、栽培したぶどうからおこした自家製酵母種をつかってパンを焼き、少量ではあるが販売している。だから、825 で酵母を採取し、自家栽培の小麦でパンを焼くことに関しては、他の項目に比べると応用できる知識と技術は多い。

ただ、酵母についての議論には多くの時間を費やした。825 で酵母を採取しその酵母でパンを焼く意味は何か。酵母というのは空気中の至る所に存在する。至る所、ということは825 の外（例えば砂田）で栽培された小麦粉の中にも存在する。実際に、砂田で栽培した小麦を石臼で挽いて水を混ぜて室内に置いていたところ、翌日にははっきりと発酵がおこっている証拠の気泡がたくさん見られた。排他的な意味で825 の酵母ということを実現するには、825 で小麦を栽培しなければならないが、それは現実にはすでに間に合わないし、見方を変えれば、そもそもどこにでもいる酵母に場所の属性を加えようという意識がすでに滑稽な感じがしてくる。むしろ、酵母と場所について考えるなら、活動＝生活の場所と自分自身の動的な関係に目を向けるべきである。作った酵母種にすんでいる酵母がもともといた場所は、ぼくがいた場所と重なる。酵母はぼくがいた場所を記憶しているのだ。

2008年9月から奉納までには、パン焼きのテストを5回した。パンは、最終的には、ココア生地チョコチップとオレンジピールが入っている「チョコパン」と、栽培した小麦を発芽小麦にしてすりつぶしたものを含むパンで、825 のユズと自家製のニホンミツバチの蜂蜜を使ったユズバターをはさんだ「ユズバターサンド」の2種類準備した。神楽を観ながら食べられる菓子パン的なパンだ。酵母種はいずれも825 で栽培しているぶどう（ベリーA）からおこしたのものを使った。材料には購入したものも含まれている。

◎協力者・訪問者

活動は、これに関心を持ってくれる協力者や訪問者がいなければ継続できない。

大学の友人家族、実父母と義父母と妻と娘は直接の協力者であり、ものを運んでくれたり、作業を代行してくれたりした。彼らとは、825で焼いたパンを分け合った。

本学の松井利夫教授、義弟、なごみ農園（実家）の客、家族が世話になっている鍼灸師などが、825にやってきた。いずれ、825で焼いたパンを送ることをもって報告したい。

◎ブログの更新

ブログの更新は、はじめ当日中におこなっていたが、年度が替わる頃から後日更新するようになった。そして、最大で数ヶ月後という事態に陥った。ブログが更新できていると卒業研究の中間レポートが書きやすいし、そのようにして活動を公開することで活動そのものを推進する働きもあるので、書く動機は十分にあった。しかし、活動をその都度反省して文章化するのはまとまった時間を要し、その時間はなかなかとれなかった。仕事や教育実習などのその他の活動の多忙化もその原因だった。

そういった反省点があるものの、大きなメリットも感じた。この卒業研究のような文化的な活動は原則として、いつでも停止できて、いつでも再開できる。また、それを伝えるブログのような公開メディアは、活動自体が停止状態でもこれに代わって、常に他者に認識される状態にしておくことができ、外部に対して効果的だ。また、卒業研究の指導教官に対して、レポートや中間発表に限らず、ブログによっても活動の進捗状況を伝えることができた。

◎パンの奉納

荒神様の神楽が2008年11月15日に行われた。神楽の内容はいわゆる備中神楽で、その中には、大国主命（オオクニヌシノミコト）が打ち出の小槌を持って現れて、舞台である神殿（こうどの）から観衆に向かって「福の種」をばらまく演目がある。普通、福の種は荒神様に奉納された餅、みかん、スナック菓子などだが、今回は825で焼いたパンも福の種となった。パンの奉納は、活動が外部と接続するきっかけを求めてのことであった。

後から聞いたことだが、祭の数日前、ぼくらが試し焼きしたパンを、父が祭の準備をしているところに持っていき、当番組の方々に試食してもらっていた。頼んだわけではなかつ

たが、父はそういうことを自然とやってしまうところがある。ぼくはその場にいなかったが、お年寄りの多い組内で「おいしい」という感想があったということや、祭を陰で取り仕切る事情通のおばちゃん（スーちゃん）が「このパンはハチンゴで焼いとるんじゃ」とそこにいるみなさんに説明してくれていたことを、父母から聞いた。

パンが荒神様に奉納され福の種となって宙を舞うというのは、家の代表として祭の準備に参加したことの無い、つまりまだ子供扱いのぼくが祭の表層で思いついたことだ。その実践も祭への参加の1つには違いない。しかし、当番組の方々に試食をしていただいた後の奉納によって、思いがけず、荒神様とのつながりがより太いものとなったと思う。

神楽に来る多くの子供たちは、福の種を目当てにやってくる。これも参加の1つだが、神楽そのものには関心がない。神楽への関心を引き出す説明を子供に対してできる大人がいないことに加え、福の種のほとんどが膨大な量の小袋タイプのスナック菓子なのはいつもながら寂しい。パンは切り分けて100袋準備したが、それらのスナック菓子に比べて圧倒的に少量だった。それゆえパンが福の種に含まれていたことに、気づかなかった人が少なくなかっただろう。それでも、奉納前の試食パンは、福の種として宙を舞ったパンの意味を支えている。

● 結論

まとめに入る前に、今後の課題を述べておこう。個別具体的なことでいうと、藁葺きや茅葺きの屋根をもつ建物作り、小麦の栽培や精製行程の省力化、あるいは、家や地域に伝わる「農」、「山」との精神的・文化的な継承などを検討したい。活動全体の課題としては、メディア、地域の祭、ワークショップ、学校教育活動など他者との接点に成長のきっかけを見出しながら、「外部の問題を内部化して」社会的な意味合いを持たせていけるような内容とし、また、活動それ自体が生産性をもつことにより、生活に負荷をかけず、可能な限り生活と融合していく方向で継続させていきたい。

さて、芸術学科の卒業論文として、「芸術とは何か」という問いに自分なりの答えを示さないといけない。そうすることで、芸術学科で芸術教育を受けた、と認められる。しかも、学んだ、学んでないの白黒判定ではなく、どのように学んだかが様々な視点で読み取られることになる。あらかじめ用意されたゴールに到達する、誰かが作った考え方に自分を当てはめる、それらは、論文を書くための感性と思考のトレーニングとして必要なことには違いないが、自分なりの目標とはいえない。自分なりの答えが求められるというのは、検定試験の解答のような正解が準備されているわけではないということだ。

トレーニングをした上で、自分で考え、広く他者の立場でも当てはまる考え方を作りだし、そして公開する。すると、次は他者がこの立場に立ってトレーニングして自分の論文を書く、という可能性が生まれてくる。インターネットのような多対多の関係だ。この網の目の関係の中に自分の論文を持って参加を試みる、しかも、その論文が、他の人にとってこの関係の出入り口ともなり得るように、書き方や内容を配慮する。学問とはこのような関わり方の行為だ。感性と思考の海に入り、海に一体化し、海を持続させる、全体としてはそういう営みだ。

そして、ぼくは、芸術こそ、そういった学問のように、否、むしろ学問よりもさらに開かれた営みであるべきだと考える。学問は論文で学び、論文としてあらねばならない。つまり、そこには論文を書き上げるという目的と、感性や思考を働かせるという手段が固定されている。一方、芸術は、感性や思考の働くプロセスそれ自体がむき出しになったものとして成り立っている、あるいはそれで成り立ち得るものだ。目的や手段すら限定することなく、あらゆる活動プロセスから芸術を学ぶことが可能なのだ。

ぼくは一度、芸術大学で芸術やデザインを学び、卒業している。再び芸術を志し、芸術という営みに参加しようとする動機を持つならば、そこには、芸術が本当に開かれた営みかどうかを、自分が志し参加することによってこそ、確かめねばならないという思いが含まれることになる。思い起こせば、金持ちのための「芸術」、わかる人にしかわからない「芸術」、都会でしか出会えない「芸術」、目や耳を通してしか楽しめない「芸術」、自然からはみ出した「芸術」など、この10数年間で「芸術」の閉鎖性ばかりが気になって、時にうんざりしてきた。ぼくには「芸術」からの「卒業」が必要なのだ。すなわち、学問以上に開かれた営みとして芸術の海を思い描く、ということを経験学科の卒論として書き上げるほかにない。

ところで、芸術学科の卒論は、普通、過去の芸術作品やそれについての文献、あるいは進行中の活動を調べて書くものだ。「芸術とは何か」という問いに対して、何か結論のようなものを示そうとしたものは多くあって、そういうものを読んでいくうちに、自分でも書けるようになる。また教員と面接してその質問に対し、学んだ言葉を組み合わせて回答を示すことができるようになる。普通、それで合格であり、自分なりに、ということも認められるわけだ。しかし、そうしたことが合格のために十分であっても、ぼくは、その手の芸術学科の卒論を書こうという気持ちは起きなかったし、必要なこととも思えなかった。

ぼくは、大学キャンパスや一人暮らしの下宿ではなく、既に家族という他者と一体となった生活の中に身を置いている。大学生として卒論を書くという行為は、自分の生活から離れ、論文の世界に没入する、ということだ。仕事をしながら、子守りをしながら卒論を書くのは不可能だ。仕事から帰ってから、家族が眠ってから、図書館に行ってから、生活という陸地から離れ活字の海に浸らないと論文は書けない。果たして、思考や感性を生活から離して書くレポートや論文に、どんな可能性が残っているのか。むしろ、生活と折り合いをつけながら学ぶ、何かを作る、計画して実行する、それ自体が尊いことではないのか。

「通信教育」の攻略として、一つずつ課題に合格するよう努力する。しかし、最後には、あるいはその過程で、その学びの仕組みに隣接する自分の生活を変革したい（ぼくにとっては「芸術」とけりをつけることが含まれる）。この卒論を含めてこれまでやってきたことは、「通信教育」という学びの仕組みをどうにか利用して、自分の生活を別世界と接続してやろう、自分の生活を新しく、修復・再生させてやろうという企みだったのだ。だから、日々の暮らしとそうでないところを行き来する活動を計画・実践し、それを報告するということが、ぼくが芸術について考え、語るための方便となったのは自然なことだ。

芸術は開かれた営みであるべきである、ということを書く動機に、芸術と呼ばれるもの（あるいは芸術教育と呼ばれるもの）が、全体として先細りの営みに感じて仕方がなかった、ということがあった。この卒論は実践の報告だが、それらに対する批判ともなるはずだ。自分自身が開かれた営みを実践し、自然、生活、学問などの活動のプロセスに自分をつっこんで、それら複数のプロセスを組み合わせる。それが結果として他者から芸術と呼ばれるかどうかはいったん棚に上げて、まずは実践して提示することを目指した。自分が「芸術とは開かれた営みである」と思ってやっているということは、〈ひっくり返せば〉開かれた営みを目指した自分の実践は芸術的であるという主張になるだろうと思ったからだ。もしここで〈ひっくり返す〉ことが実現しているならば、ぼくは「芸術」とけりをつけたということになるだろうし、加えて、新しいバージョンの芸術教育が機能した、ということにもなるだろう。

この論文は「芸術とは何か」の問いに対する回答を、一言で語り、際立たせるように示すのではなく、生活と「芸術」の間に段差をつけたり、生活と芸術をシームレスにつなぎ合わせようとしたときの、そのつなぎの部分、折り合いの部分に読み手の視線を誘導することになるはずだ。少なくとも、ぼくにとってその部分こそ「芸術とは何か」と考えはじめの入口でもあり、考えることをやめる出口ともなるのである。 (字数 13359)

【参考文献】

- 室井尚『ポストアート論』白馬書房 1988年
- 甲田幹夫『ルヴァンの天然酵母パン』柴田書店 2001年
- 中村生雄『祭祀と供犠 日本人の自然観・動物観』法蔵館 2001年
- マッケンジー・ワーク 金田智之訳『ハッカー宣言』河出書房新社 2005年
- 近藤邦明『温暖化は憂うべきことだろうか CO2地球温暖化脅威説の虚構』不知火書房 2006年
- 植田敦『弱者のための「エントロピー経済学」入門』ほたる出版 2007年
- 須藤章『続 石窯のつくり方・楽しみ方』月刊 現代農業 2008.7～(2008.12) 農文協 2008年